

キャンプ活動が幼児・児童の責任感に与える影響

奥本 翔太 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 中野 友博

キーワード：キャンプ 幼児・児童 責任感

1. 諸言

人の一生の中で、幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる大切な時期である。幼児は、生活や遊びといった体験を通じて、情緒的・知的な発達や社会性を身につけていく。人間として、社会の一員として、普通に、そして、より良く生きていくための基礎を獲得していく。

最近の幼児の育ちについて、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他人とのかかわりが苦手である、我慢ができない、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている。また、小学校1年生の教室で、学習に集中できない、先生の話が聞けずに授業が成立しないなどクラスがうまく機能しない状況も報告されている。

最近ではキャンプにいろいろな効果があることがわかり、社会性を向上させる効果も小山ら(2008)の研究で明らかとなっている。²⁾

そこで、本研究では、人格基盤となる幼児期とキャンプ活動との関係性に着目し、キャンプ活動が幼児・児童の責任感に与える影響について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

1) 幼児・児童低学年用責任感尺度の作成

幼児・児童低学年用責任感尺度の作成方法は、〇市に設置された幼稚園、保育園の教諭、保育士を対象に幼児の責任感の感じられる言動の位置づけとして、園での活動で責任感が感じられる言動と家庭での活動で責任感が感じられる言動について記述式のアンケート調査を実施した。その後、記述内容から作成した7項目と大道(2008年)が作成した児童・生徒用責任感尺度の19項目のうち、本研究の対象年齢にも当てはめることが可能な項目10項目を抜粋した計17項目の調査用紙を作成し、これを幼児・児童低学年用責任感尺度とした。¹⁾

2) キャンプ活動での幼児・児童の責任感の変容

調査対象は、2011年8月12日と8月24～26日に〇市で実施された「びわこ・ちびっこキャンプ2011」に参加した幼児年長、小学1年生、2年生、計30名の保護者を対象にキャンプ前(Pre)、キャンプ1週間後(Post)、キャンプ6週間後(Post1)の3回、1)で作成した調査用紙を使用してアンケートを実施した。

3. 結果と考察

幼児・児童低学年用責任感尺度を因子分析した結果、3因子が抽出され、それぞれ、「規律への意識因子」、「協調性への意識因子」、「課題遂行への意識因子」と命名し、これを幼児・児童用責任感尺度とした。

責任感の変容について、調査時期を要因とした1要因分散分析の結果、5%水準で有意な効果が見られた($F(2, 52)=4.817, p<.05$)。結果を表1に示した。また、多重比較の結果では、Pre-Post間で10%水準で有意な傾向が見られ(Pre<Post)、Pre-Post1間で5%水準で有意な効果が見られた(Pre<post1)。結果を図1に示した。これは、キャンププログラムのテント設営や自分たちの食事作りなどの自分がしなければいけないという状況が幼児・児童の責任感に影響を与えたのではないかと考える。

表1 責任感得点平均と標準偏差 (N=27)

Pre		Post		Post1	
M	SD	M	SD	M	SD
34.78	6.091	37.26	5.627	37.41	5.597

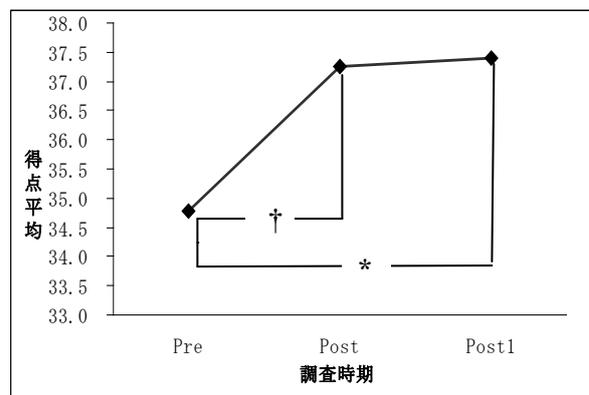


図1 責任感得点平均の推移 †:p<.10
*:p<.05

4. まとめ

本研究では、キャンプ活動が幼児・児童の責任感に与える影響について明らかにすることを目的とし、研究を行った。その結果、キャンプ活動は、幼児・児童の責任感に有意な効果を及ぼすことが明らかとなった。

主要参考・引用文献

- 1) 大道遊: キャンプ体験が児童・生徒の責任感に及ぼす影響～児童生徒用責任感尺度作成の試み～、びわこ成蹊スポーツ大学2008年度卒業研究
- 2) 小山諒、岡村泰斗、井村仁: 長期継続型デイ・キャンプが参加児童の社会的スキルに及ぼす影響～キャンプ場面による学習と日常場面への般化の関連に着目して～、国立青少年教育振興機構研究紀要、8号、2008年